

# 旭川「カタクリの里」に身売りの危機

## 競売を契機に高まる関心 公有地化で「散策の森」を

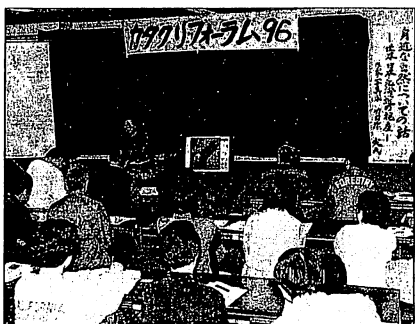
ルポライター  
滝川康治

竹田津さんの話の結論である。

年に入り、ゴルフ場用地が競売にかけられて、突哨山の保全活動は新たな局面を迎えている。



国内有数のカタクリの群落広がる早春の突哨山（4月27日、南端部の男山自然公園で）



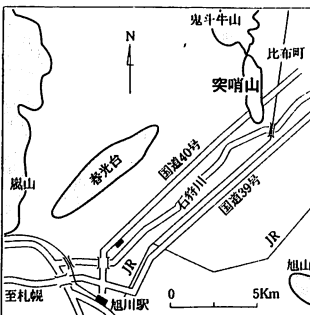
今年で4回目を迎えた「カタクリフォーラム」

今年で4回目を迎えた「カタクリフォーラム」

このフォーラムの二カ月間、ゴルフ場反対運動を続けてきた、突哨山の自然を考える会（出羽寛代表・会員約七百人）の緊急集会在旭川市内で開かれた。ここでは、突哨山の公有地化を求める運動のあり方を中心に、保全に向けたさまざまな意見が飛び交った。

さ話をし、旭川に来て八年の家具関係の仕事をしている人が、「この町で初めて『いい所があるな』と感じた場所。今までの役所は形のあるものを造るものが多かったが、突哨山には、何もやらないデザイン」があつていい」と行政の発想の転換を促した。

道内の「身近な自然地域」にも選ばれている突哨山では、東京の不動産会社が比布町につくった現地法人の手で土地買収が進められ、九四年のオープンを目標にゴルフ場を造成する計画が持ち上がった。が、地元農家や市民の反対運動やバブル経済の崩壊などによって計画は事実上頓挫し、計画用地は旭川地方裁判所に差し押さえられた。今



### 「身近な自然」めぐって議論

旭川市の市街地から国道40号線を北へ二十分ほど行くと、隣の比布町との境界にシラカバやナラなどの雑木林におおわれた突哨山がある。緑の岬のように、上川盆地に細長く突き出した緩やかな丘陵地帯は、隣の鬼斗牛山とともに旭川市の北側で唯一まとまった緑地だ。

いてみた。今年は雪解けが遅く、突哨山も旭川刑務所の裏手あたりは、ようやくカタクリの開花が始まったところ。山頂部などに残雪があり、この分だと五月中旬ころまで花が楽しめるうだ。南端部は男山自然公園になっているが、ここではカタクリやエゾエンゴサクが満開で、散策や写真撮影に訪れた人々にぎわいを見せていた。

# 頓挫したゴルフ場開発計画

旭川市と比布町にまたがる突哨山の山林など約百八十ヘクタール（山全体の約八割）に、二十七ホール（その後十八ホールに縮小）のゴルフ場を造成する計画について、事前申請書が道に提出されたのは九〇年十一月のことである。道のゴルフ場規制要綱が制定される、わずか五日前の駆け込み申請だった。

事業主体は、東京の不動産業者・新（伊土幸夫社長・資本金千二百万円）が、クラブハウスを設置する予定だった比布町に設立した現地法人・パストラル（同社長）。幸新は都内で飲食店などを経営する一方で、道内外数カ所でゴルフ場を造成・転売した実績がある。パストラルは八八年ころから用地買取を進めており、その買収総額は五億円にのぼるとされる。

が、造成計画が明らかになった直後から、予定地に隣接する東鷹栖地区の農家から反対の声が上がり、九一年夏には突哨山の自然を考える会が結成されるなど、反対運動が拡がった。その後、パブル崩壊も手伝って計画は破綻

し、九三年暮れになるとパストラルは地元の自治体や土地改良区に開発計画の凍結を表明。営業所も閉鎖した。予定地には、九二年に拓銀が十億円、北海道銀行が二億円で、九四年には飛鳥建設が一億三千万円で、それぞれ根拠を認定済み。そして九四年になると、両銀行が旭川地裁に差し押さえを申請し、買収した用地が競売にかけられることになった。この三月、第一

回の競売（最低売却価格は約一億一千万円）に付されたが、入札参加者が現山として突哨山と接してきたことが理解できる。

## 里山に愛着を寄せざる農業者

突哨山の林の一角を牧場に切り開いて、父親の代から酪農を営んできた片山隆徳さん（61）は、業者側の買収工作を全く相手にしなかった。ゴルフ場なんかに使ってほしくない山だ」と思

うし、息子たちは他の仕事に就いたが、自分は牛飼いが肌に合っている。この自然にも愛着がある。

れず成立しなかった。今年夏に第二回の競売が行なわれる予定だ。

ゴルフ場反対運動を続けてきた「考える会」は昨年十二月、市に対して、  
①突哨山を「散策の森」として活用し、土地を公有地化してほしい  
②「散策の森」は構想づくりの段階から市民参加の方策を取ってほしい  
③自然を活かした体験学習や生涯学習のモデルコースとして突哨山を活用してほしい

と三項目の要望書を提出して、公有地化を求めた。前出の集会は、こうした流れを受けて開かれたのだった。

あるとき業者が排水の調整池の図面を見せて、「片山さんのところには排水を出さない」と言ったが、よく見ると牧場に排水が押し寄せてくる計画だった。取材に訪れたわたしを、牧場脇と



突哨山の麓で農業を営む黒川博徳さん

が増えているんですよ」

と笑顔を見せる黒川さんは、地元さまざまな団体で構成する「東鷹栖の地酒造る会」の代表でもある。昨年から市内の酒造会社に依頼して、地元産のさらさら397を原料にした純米酒を造っている。地酒の名前は「かたくりの里」。ここにも突哨山に寄せる愛着の強さが感じられる。

## 緑のネットワークづくり提言

二次林の突哨山には、里山としての生態系が豊富にある。カタクリの群落をはじめ、千五百種類以上の動植物が生息・生育する豊かな自然が維持されている。笹が少なく、傾斜が緩くて歩きやすいのが特色で、小川幸次・東海

大学助教授（運動生理学）がハイキングコースとしての適性を調べたら、子どもから高齢者まで家族連れで楽しめるコース——というデータが得られる



ゴルフ場反対運動を続けてきた出羽寛さん

の凍結に役立った。

十数年前にわたって旭川市の自然保護調査員を務めた経験もある出羽さんは、突哨山だけの保全を主張しているわけではない。

山林の境界にある地籍用の杭まで案内してくれた。測量業者が打ち込んだ杭は、地籍用の杭から三メートルほど牧草地寄りにはみ出している。「あやぶやな測量だよ」と片山さんが憤る。

山麓の東鷹栖地区で稲作などを営む黒川博徳さん（54）にとって、突哨山はホームグラウンドの感じがする。小学生のころ、カタクリを採ってゴマ和えやおひたしにして食べた。ザリガニを捕って煮て食べようとしたり、山イチゴやコクワを採りに出かけた。一度だけ、セミが羽化する瞬間を目撃したことがあり、「その感動は一生忘れられない」。突哨山に黒川さんの畑はなかったが、共同作業で燕麦を収穫した思い出もある。地域の小学校では、遠足の目的地が突哨山だった。

ゴルフ場の造成話を耳にしたのは、用地買取がかなり進んだ九〇年初めのこと。開拓時代から開放されていた突哨山は、山林などの地権者は分散していた。大雨時に道路が川のようになるのを体験していたので、山林を伐採する計画には疑問が募った。すぐに知事や市長、農業委員会の会長などに直訴の手紙を書いて、反対運動を始めた。

七〇年代半ば、市には「放射環状型緑化（緑のネットワーク）構想」があり、突哨山の周辺は「保全地域」と位置づけられていた。出羽さんは、当時の構想を重要視し、こう力説する。「北の要が突哨山、南の要が嵐山。市内を流れる川がそれらを結びつける緑の回廊になる——わたしは、かつての構想をベースに考えたい」

突哨山を保全できるかどうかは、身近な自然に対する市民の関心の高まりがキーワードになりそうである。旭川市で商業を営む一方、造形家としても活躍する藤井忠行さん（52）は、仲間の版画家や建築家らと「自然探索工房」というグループをつくり、ここ数年、「身近な自然をテーマにした公募写真展を開催してきた。季節ごとに三回開いた写真展には、延べ四十五人の市民らが作品を寄せた。いま、旭川周辺の環境がひと目で分かる「いきみの景観地図」を作成中だ。

「地図を作ってみて、市内の二次林を含む自然林の少なさに驚いている。旭川には、北方系の南限、南方系の北限の両方の植物層があるのが特色だが、このままいくと周辺丘陵地で良好な自

然の状態のところはなくなる」

こう危惧する藤井さんには、旭川はイメージや記憶の母型を保ちながら暮らせる町、という思いが強い。突哨山は「身近な自然」「イメージの母型」の象徴にできる場所——というのが持論でもある。

「カタクリの群落を、『素晴らしい。きれいな』と役所に言っても駄目で、価値観を相対化しないといけない。突哨山は、郷土博物館のフィールドセンターとして位置づけてはどうか。炭焼きをしたり、馬を飼う、農機具がどう使われてきたのかを体験する——というよ

## 市は静観、カギ握る市民意識

ゴルフ場計画がきっかけになって、突哨山に対する関心が少しずつ広がりをみせる。四年目の「カタクリフォーラム」には、旭川以外の参加者の姿も目立った。昨年からは、札幌の自然観察グループなどが主催するエコツアーが訪れるようになった。山を散策する市民も増えているようだ。

「考える会」は、突哨山の全面積の公有地化を要望する一方で、保全策についてさまざまな人に自由に意見を出し

うに活用すると、生きた教材になる。

競売価格の二億円は、博物館のミニメントひとつで買える値段だし、ボランティアで管理すれば維持費もそう掛からない（藤井さん）

と、フィールドセンターとしての活用を提言する。緑のネットワークについても、「いま、牛朱別川と石狩川とを結ぶ放水路工事が進んでいるが、水路周辺の緑化をうまくやって校岡となげば、突哨山との連携ができる。突哨山はそうした緑の連続体の一つと考えたい」と、突哨山と放水路と校岡の緑地帯構想を具体的に語った。

合ってもらい、市民向けの「提言」を今年中にまとめる、という。旭鷹土地改良区では、開発行為による農業への影響を回避するため、突哨山の公有地化を市に要望し、市総合計画の策定に向けた議論のなかでも、こうした提言を行なっている。公有地化の議論は、縮についたところである。

菅原功一市長は「昨年の市長選の際に、『考える会』の公開質問状に対して、『貴重な自然の保全方法は『自然の花

公園』『散策の森』など市民の意見を聞きながら進めるべきだ」などと、一定の理解を示してはいる。今年三月の定例市議会でも、複数の議員が公有地化をめぐる質問が行なうなど、論議も活発化している。

が、市側は「民事不介入」を楯に競売の行方を静観しており、すぐに公有地化に乗り出す気配はない。

「事業者側が新たなパートナー探しをしているとの話もあり、計画の続行もありうる。（公有地化には）まだ大多数

の市民の合意が得られていない。競売手続きなどの動向を見極めつつ、市民の合意が得られる段階になれば（買い取りを）検討していきたい」（企画調整部の幹部）と慎重な口ぶりだ。公有地化までには、まだまだ多くの曲折がありそうである。

公有地化を含めた突哨山一帯の保全を実現させるには、市民の関心が高まり、「金は出しても口出さず」の施策を実施せざるを得ない機運を創り出すことが大切なだろう。



鬼斗牛山から見た突哨山（撮影・出羽寛さん）



公有地化のあり方や保全策を論議した「考える会」の集会（2月27日）